

## 定家本『伊勢集』の書写態度

著者	加藤 雄一
引用	百舌鳥国文. 2021, 30, P.105-117
URL	<a href="http://doi.org/10.24729/00017429">http://doi.org/10.24729/00017429</a>

# 定家本『伊勢集』の書写態度

加藤 雄 一

## 一、はじめに

宇多・醍醐朝に活躍した伊勢は、三代集における入集歌数が女性としては常に最多数を誇り、敬愛された歌人であった。

その伊勢の家集『伊勢集』は、冒頭に歌物語的部分、いわゆる「伊勢日記」を有し、後半には歌枕を多く含む古歌集が連結して、一般的な私家集とは一線を画している。伝本は現行三系統に分類され、同一祖本から派生したものだと言われているが、書写年次の最も古い西本願寺本を中心に『伊勢集』研究はなされてきた。しかし、同一祖本から派生したとは言いがくから、その本文の様相は複雑で、多くの問題点を抱えている。そこで本論文では、藤原定家監督書写本である天理図書館蔵本（以下「定家本」と称す）を用いて、西本願寺本との本文異同に注目しながら、定家本『伊勢集』の生成過程の一端を考察する。

## 二、異同の様相

まず、定家本と西本願寺本について触れておきたい。

定家本とは、先に触れたように、天理大学付属図書館蔵本で、定家が外題を書き、本文は側近の者たちが書写するという、定家晩年期に見られる書写活動によって生み出されたものである。<sup>(1)</sup>『私家集大成』に収録されている正保版歌仙家集本（伊勢Ⅲ）はこの定家本系統に属する。

西本願寺本は、天永三年（一一二二年）の白河法皇六十賀の贈答品として書写されたものといわれる三十六人集の一つで、『伊勢集』の伝本の中では最古の写本である。そのため多くの注釈書はこの本を底本に用いている。また『私家集大成』の「伊勢Ⅰ」はこれを翻刻したものである。

定家本の総歌数は四八八首、西本願寺本の総歌数は四八三首である。定家本のうち三四首は西本願寺本には存在しない歌で

あるため、共通歌は四五四首となる。そのうち、歌本文に全く異なるない歌は一〇六首ある。それ以外の歌には何かしらの異同が生じていて、その数は延べ五〇〇箇所以上にも及ぶ。その中で、仮名遣いだけが異なる歌は一四首あり、それを全く異同のない歌数に含めると共通歌は一二〇首となり、全体の約四分の一に当たる。

数々の異同の中には、例えば、

(1) みづのえのかたみとおもへばうぐひすのはなのくしげは  
あけてだに見ず (定・三七二)

みづのえのかたみとおもへばうぐひすのはなのくしげも  
あけてだにみず (西・三五八)

(2) こゝらよをきくが中にもかなしきに人のなみだもはてや  
しぬらむ (定・三八二)

こゝらよをきくがなかにもかなしきに人のなみだはてや  
やしぬらん (西・四四七)

のように、「は」の草体(者(𠂔)・盤(𠂔))と「も」の草体(裳(𠂔))の類似によって起きたとみられるものがある。「も」と「は」が交替する例は、双方合わせて九例ある。また「も」(裳(𠂔))は、「の」(農(𠂔))とも近似しており、  
(3) きく人もあはれといふなるおもひにはいとゞなみだもつ

きずもあるかな (定・三八二)

きく人もあはれといふなるおもひにはいとゞなみだのつ  
きずもあるかな (西・四四八)

などの異同も双方合わせて五例見られる。さらには、

(4) たきつせとなに|な|がるればたまのを|にあひみし|ほどをく  
らべつるかな (定・三三三)

たきつせとな|な|がるればたまのを|あひみし|ほどをく  
らべつるかな (西・三三三)

のように、「の」(乃(𠂔))と「に」(耳(𠂔))の異同は『伊勢集』内で最も多く、双方合わせて一三例もある。こうした一字の異同の大半は字体の類似によって起きたものだと考えられる。

その他にも、

(5) きよけれどたまならぬ|身|のわびしきはみがけるものにい  
はぬなりけり (定・一六六)

たまならぬ|み|のうきことはきよけれど|み|がけるものとい  
はぬなりけり (西・一六〇)

のように、語順の交替が起きている例や、

(6) くもゐにてあひかたらはぬ|月|だにもわがやどすぎて|わた  
るとはみず (定・二二六)

雲井にてあひかたらはぬ月だにを我やどすぎてゆくよひ  
はなし  
(西・一二五)

のように、句全体が異なっている例などを挙げる事ができる。この二つは、(1) (3) の例とは様相が異なり、単純な誤写とは考えられないことから、個々に検討が必要になるが、本稿では指摘するにとどめ、改めて考察したいと思う。

このように、定家本と西本願寺本には様々な形態の異同が見られるわけだが、字体からの類似や目移りによる誤写といった異同であると片付けてしまうことができない歌が存在する。その歌を次に取り上げて考察したい。

### 三、「にぞありける」と「にざりける」

歌の結句に置く定型句の一つに「にぞありける」がある。早くは『万葉集』にも、

いもとありし ときはあれども わかれては ころもでき  
むき ものにぞありける  
(万葉集・巻十五・三五九)

のようにみられ、<sup>(2)</sup> 仁和元年(八八五)頃に催された『民部卿家歌合』においても、

月夜にはをぐらの山の郭公声もかくれぬ物にぞ有りける

(八)

と詠まれた例がある。

『伊勢集』においてもこの表現が四例確認できる。

心してたまもはかれどそでごとくにひかりもみえぬあまにぞ  
ありける  
(定・六九)

心してたまもはかれどそでごとくにひかりみえぬはあまにざ  
りける  
(西・七〇)

めづらしくあふたなばたはよそ人もかげ見まほしき物にぞ  
ありける  
(定・八二)

めづらしくあふたなばたはよそ人も影みまほしき物にざ  
りける  
(西・八三)

としをへておもひはずみにありながらおきりはつかぬもの  
にぞありける  
(定・一七五)

としをへておもはずにのみありながらおきりもつかぬ物に  
ざりける  
(西・一七〇)

さくらばなどしにかへねどうつせみのよをためしにてちる  
にぞありける  
(定・三二二)

さくら花としにかへねどうつせみのよをためしにてちるに  
ざりける  
(西・三一八)

列挙してみると、定家本では「にぞありける」、西本願寺本では「にざりける」に分かれていることに気づく。

西本願寺本の「にざりける」は、係助詞「ぞ」に動詞「あり」が接続し、短縮されて「ざり」となったもので、平安時代の和歌に用例が見られる。事実、西本願寺本三十六人集<sup>3</sup>で用例数を確認してみると、

にぞありける……三九首

(興風1・躬恒4・友則1・忠岑1・是則1・敦忠

2・貫之12・忠見1・元真3・朝忠1・順1・齋宮女御1・能宣3・重之5・小大君2)

にざりける……六七首

(赤人2・家持1・猿丸1・興風1・躬恒10・忠岑

1・伊勢7・宗于1・貫之14・中務3・清正1・信明1・順2・齋宮女御5・元輔2・能宣6・重之9)

のように、共に多用されており、さらに、傍線を施した家集は「にぞありける」と「にざりける」が混在していて、その数は半数近くにも及ぶ。このことから平安中期には二つの表現が共存しつつも、「にざりける」の方が優勢であることには間違いないなさそうである。

次に、『万葉集』と三代集『新編国歌大観』所収の定家本の本文に拠る)ではどうであろうか。

にぞありける…万葉集・三例／古今集・一五例／後撰集・

二九例／拾遺集・二五例

にざりける…万葉集・古今集・後撰集・拾遺集に用例ナシ

右のように全てが「にぞありける」で、「にざりける」の用例は一例もなかった。

ただし、非定家本の勅撰集についてはこの限りではない。『後撰集』では、堀河本に四例、『拾遺集』では、堀河本に二例、天理図書館甲本に四例、北野天満宮本に一例と、僅かではあるが「にざりける」が用いられている。『古今集』に至っては、黒川本掲載の基俊本復原本文(五例)、伏見宮本(四例)、元永本・天理図書館所蔵清輔本・右衛門切(三例)、関戸本・飛鳥井雅経筆本(二例)などに異同が確認できる。なかでも注目されるのが、伝公任筆本であり、七七八・八六六番歌を除いた全てが「にざりける」となっている。伝公任筆本は十二世紀初頭に書写されたと言われているが、これはまさしく西本願寺本の書写年代と重なり、この当時においては「にざりける」が圧倒的であったことの裏付けとなる。

続けて、『伊勢集』以外の西本願寺本三十六人集に出現する「にざりける」が、定家本系統において「にぞありける」であるかを確認しておこう。用例がある家集の中で、定家本(ある



## 【齋宮女御集Ⅰ】

又、いかなるおりにか

よそならぬときはのやまもしぐれつゝ

いつもふもとのくさはぬれしや

うらみてはおもひしらなんしらなみの

かゝるをあしといふにざりける

(一六三)

(一六四)

また

ひまもなく心ひとつにみる人の

もらせばもるゝみづもありけり

(一六五)

## 【村上御集】

とありければ、又これより

よそならぬ常磐の山もしぐれつゝ

いつもふもとの草はぬれしを

うらみても思ひしらなむしらなみの

かゝるをあしといふにぞ有べき

たまづさの玉かさにもあればこそ

とふしるしにはかりにてもみれ

ひまもなく心ひとつにみる人の

もらせばもるゝ水もありけり

(七六)

(七七)

(七八)

(七九)

すように、ほぼ一致している（異同の箇所には傍線を施した<sup>(5)</sup>）。これは、『村上御集』そのものではないにしても、何か別の資料によつて増補された部分であろう。

つまり、七四番歌の「うらみても」歌は、定家本がはじめから保有していた歌であり、一六四歌の「うらみても」歌は、定家本にはない歌を別資料から補つた歌であつて、同一歌ではありながら性格が異なっていることが分かる。よつて、七四番歌の「にぞありける」を以て一六四番歌の「にざりける」を改めることはせずに、定家本はそのまま書写したと考えられる。

このようなことから、定家本は、二つの表現が併用されている場合、その歌が両方の表現を持つて存在していれば、正しいと判断した方の表現を選択して書写している。また、その歌に表現の揺れがなく、その表現しかない場合は、むやみに直さずにそのまま書写している。さらには定家本の中で重出している歌については、一方の歌で一方の歌を校訂することもしないという書写姿勢をうかがうことができる。

#### 四、定家の判断——俊頼の歌をめぐって——

では、定家が正しいと判断する基準とは何か、今一度ここで  
おさえておく必要があるだろう。

まず三十六人集以後の「にざりける」の動向を追ってみる  
と、

よそながらあかぬこずをたづぬればきみがすみかのはな  
にざりける (行宗集・二二)

あひ見むといひわたりしはゆく末の物思ふことのはしにざり  
りける (成通集・六)

わがやどにけふ咲きそむる女郎花秋をしらすつまにざり  
ける (月詣集・巻七・六三二・智経)

などを挙げることができるが、それ以後はほとんど詠まれるこ  
とがなくなる。

次に定家本『伊勢集』の書写監督を務める定家自身はこの表現  
を自身の和歌の中でどう詠んでいるか確認しておきたい。『拾遺  
愚草』で該当する歌は四首（五四・二三七・四三三・三六九八）あ  
るが、すべて「にぞ有りける」と詠んでいる。また、定家と同  
時代の歌人の家集を確認してみても、「にざりける」と詠んだ  
例は見当たらない。ということとは、「にぞありける」が正しい

と判断して、「にざりける」とあったものを、定家本では「に  
ぞありける」と直してしまつた可能性はないのだろうか。

そこで注目したいのが、冷泉家時雨亭叢書第二四卷『散木奇  
歌集』に所収された「源木工集」である。<sup>6)</sup> この本は定家本『伊  
勢集』と同様に、冒頭を定家が書き、本文を側近の者たちが  
書写した俊頼の家集であり、「流布本（俊頼Ⅰ）に比べ新出歌  
一〇首を含むが、草稿本性格が濃厚」な本であるという。こ  
の本が出現するまでは、近世初期に書写されたといわれる書陵  
部蔵五〇一・七二三『散木奇歌集』を用いて俊頼の歌を解読し  
ていたことになる。そこには「にぞありける」と詠まれた歌  
が二六首収められている。定家本も同一歌を所収しているが、  
「にぞありける」と詠まれた歌は僅か四首だけで、あとは全て  
「にざりける」となっている。つまり、定家本を見る限りでは、  
俊頼は「にぞありける」とも詠めば「にざりける」とも詠んで  
いたことがわかるのである。

先程考察の対象として挙げた定家本の家集から考えれば、定  
家本では「にぞありける」と書写されるのではないかと推察で  
きるわけだが、これまでの定家本の家集と俊頼の家集が決定的  
に異なる点は、『散木奇歌集』は、詠者本人が編纂した家集で  
あるということである。つまり、俊頼自身が「にざりける」と



詠んで書いた歌であるから、定家はむやみに直すことはせず  
に、そのまま「にざりける」と書写していると考えてよいだろ  
う。

俊頼自身が「にざりける」と詠んだか否かは、俊頼が編纂し  
た『金葉集』が参考になる。次にその歌を取り上げて考察して  
みたい。

(1) 春さめ(マ)にふりしむれどもうぐひすのこゑはしをれぬもの  
にざりける  
(金葉集初・春・一八)

はるさめはふりしむれどもうぐひすのこゑはしほれぬ物  
にぞありける  
(金葉二・一六)

春雨はふりしむれども鶯の声はしほれぬ物にぞありける

(俊頼 I・五〇)

はるさめはふりしむれどもうぐひすのこゑはしほれぬも  
のにざりける  
(俊頼 III・四九)

(2) ほととぎすまつよのかずはかさなれどこゑはつもらぬも  
のにざりける  
(金葉集初・夏・一七九)

郭公まつ夜の数はかさなれど声はつもらぬ物にぞ有ける

(俊頼 I・二五〇)

ほととぎすまつよのかずはかさなれどこゑはつもらぬも  
のにざりける  
(俊頼 III・二四七)

(3) さをしかのなくねはのべにきこゆれどなみだはこのも  
のにぞありける  
(金葉初・三二七)

さをしかのなくねは野辺にきこゆれどなみだはこの物  
にざりける  
(金葉三・三二五)

さをしかのなくねは野べに聞ゆれど涙はとこの物にぞあ  
りける  
(俊頼 I・四五一)

さをしかのなくねはのべにきこゆれどなみだはこのも  
のにざりける  
(俊頼 III・四四七)

初度本には「にぞありける・にざりける」の歌が、俊頼の歌  
を含め、全部で七首(一八・一三四・一五五・一六一・一七九・  
二四八・三二七)ある。その全ての歌が当代歌人のものである。

その中で俊頼は三首あるが、(1)(2)は「にざりける」と詠  
んでいて、(3)は「にぞありける」と詠んでいる。この点に  
ついては定家本の中でも両方の表現があることから、特別不審  
というわけではない。また(3)の歌は三秦本では「にざりけ  
る」とあるから、これが最もよい形だと俊頼は最終的に判断を  
して収めたのである。ここで重要なのは、俊頼の時代には既  
に「にざりける」は特異な表現で、「にぞありける」の方が一  
般的な表現であったということである。俊頼の歌人として評価  
の一つに革新的であるとよく言われるが、このように二通りの

詠みを試みる姿勢にも現れていると思われる。

第三節でも指摘したように、平安中期においては、「にざりける」の方が、原形の「にぞありける」よりも優勢であったが、このように俊頼の時代を転換期として次第に衰退していく様子がわかる。定家本『散木奇歌集』は、その様相を明示してくれる貴重な資料であるといえる。そしてこのことから、定家の時代には既に「にざりける」の表現は廃れ、原形の「にぞありける」と詠むのが一般的ではあったが、定家本の本文はそれに影響されることなく、詠まれた当時のまま書写されていると言ってよいだろう。

つまり、定家は「にぞありける」と「にざりける」の両方の本文が存在すれば、それは本来の正しい形である「にぞありける」を選び取り書写するが、たとえ両方の本文があったとしても、当人が「にざりける」と詠んでいれば、それをむやみに修正することはせず、詠まれたままの表現を重んじていることがわかった。このことは定家が学問的によの本文を尊重すべきかをその場その場で判断し、より原典に近い正確な本文を残そうとする学問的見地に立って書写していることを示しているといえるのではないだろうか。

こうした視点から書写された例が『伊勢集』にはもう一例あ

る。

## 五、「わたつみ」と「わたつうみ」

「わたつみ」は『伊勢集』に三例あるが、

わたつみとたのめしことのアせぬれば我ぞわが身のうらむ  
うらむる (定・六)

わたつうみとたのめしことのアせぬれば我ぞわがみのうら  
はうらむる (西・六)

わたつみとあれにしとをいまさらにはらばそでやあは  
ときえなむ (定・一五)

わたつうみとなりにしとをいまさらにはらばそでやあ  
はときえなむ (西・一五)

わたつみのそこにふかくはいれずともしぐれにたちもぬら  
さざらなむ (定・四六)

わたつうみのそこにふかくはいれずともしぐれにだにもぬ  
らさざらなむ (西・四七)

のように、定家本では全てが「わたつみ」であり、西本願寺本では全てが「わたつうみ」となっている。

『角川古語大辞典』<sup>7)</sup>によれば、「わたつみ」は、

①海の神。海を支配する神。豊玉彦(トヨタマヒコ)と称

するといふ。「つみ」が神を意味する語ともいわれるが、「つ」は連体助詞、「み」は靈格を意味する語であろう。

②転じて、海をいう。

と説明がなされ、また「わたつうみ」の項では、「わたつみ」の「み」を海と解することより生じた語で、「ワタズウミ」「ワダツウミ」とも読まれ、雅語として用いられた。『八雲・三』には「わたつうみ（或わたつみ）」とあり、「わたつうみ」のほうがもとの形のように意識されていたか。

とある。つまり、本来は「わたつ十み」であったが、平安時代に入ると「わたつみ」から派生した「わたつうみ」が定着していったことであろう。その過程を片桐洋一氏<sup>8)</sup>は、「綿津海の手に巻かしたる玉だすき」(『万葉集』卷三・三六六)を例に挙げて、「綿津海」と書いているように、「み」には「海」の字をあてることが一般的であったので、「わたつみ」は何時しか「わたつうみ」と言う方が多くなった。」と推察されている。

『万葉集』と三代集(『新編国歌大観』所収の定家本の本文に拠る)の用例数は次の通りである。なお「わたつ海」は両方の読みの可能性があるため『八代集総索引』<sup>9)</sup>の読みに従った。

わたつみ……………万葉集・二一例／古今集・三例／後撰集・六例／拾遺集・二例

わたつうみ……………万葉集・ナシ／古今集・四例／後撰集・一

例／拾遺集・三例

確かに『万葉集』では全てが「わたつみ」であるのに対して、三代集では「わたつみ」「わたつうみ」の両方が用いられており、平安時代には既に表現の混在が認められる。これは所謂非定家本系統の本文においても揺れが生じており、一定していない。『古今集』や『拾遺集』では若干ではあるが、「わたつうみ」の用例が多く、平安前期には通用していた表現だとみてよい。

次に、私家集における「わたつみ」「わたつうみ」の用例数を、西本願寺本三十六人集で確認しておこう。両方の用例が見られる家集には傍線を施した。

わたつみ……………六首(赤人1・清忠1・順2・能宣2)

わたつうみ……………十一首(伊勢3・重之3・躬恒2・友則

1・信明1・能宣1)

西本願寺本においても両方の用例が確認できることから、西本願寺本が「わたつうみ」と書写する方針ではないことや、三代集と同様に、「わたつうみ」が優勢であることもわかった。西

本願寺本三十六人集は、天永三年（一一二二）、白河法皇六十の賀に献上するものとして作成されたといわれているわけだが、その当時において、「わたつみ」と詠むよりは「わたつうみ」と詠む方が定着していたと捉えてもよいだろう。そして「わたつうみ」は時代が下がるにつれて用いられる頻度は増えていったようだ。

『角川古語大辞典』では、『八雲御抄』が「わたつうみ」を掲出語としてしていることについて、「もとの形のように意識されていたか」と見解を示しているが、『八雲御抄』が書かれた当時、「わたつうみ」の方が既に優勢であったことを裏付けるものとして見たほうがよさそうだ。

『俊頼髓脳』<sup>(11)</sup>では、「異名」を挙げる中に、「海の底、わたつうみといふ」「海、わたつみといふ」のように、意味により使い分けられる旨が記されている。しかし、『古今集』雑上・九一―番歌「わたつ海のかざしにさせる白妙の浪もてゆへる淡路しま山」（詠み人知らず）に施された顕昭の『古今集注』では、

顕昭云、ワタツミトハ海神トカキテヨメリ。古今序ニハ海童女トカキテ、ワタツミノムスメトヨメリ。山祇ヲモヤマツミト日本紀ニハヨメリ。又萬葉ニハ渡津海トカキテ、ワ

タツウミトモヨメリ。大海トカキテモヨメリ。海若トモカケリ。喜撰式ニハ、海底トカキテヨメリ。萬葉ニハワタノソコトモヨメリ。アハヂシマヤマハ、アハヂノ國ナリ。

とあり、「海底」の一件には触れてはいるが、『万葉集』では「ワタツウミトモヨメリ」とし、使い方の区別は厳格ではない。また、その箇所『顕註密勘』を見ても、所謂「密勘」に当たる定家の注はない。

以上の点から、定家本『伊勢集』の本文が揺れることなく「わたつみ」で一貫しているのは、本来「わたつみ」が万葉以来のことばの在り方であると学問的な見地から勘案の上、書写され残された本文であるのだろう。

定家自身はどう詠んでいるかと、自筆本の『拾遺愚草』<sup>(12)</sup>で確認してみると、全て「わたつうみ」と仮名書されている。つまり自らは「わたつみ」とは詠まないものの定家本『伊勢集』や勅撰集では「わたつみ」を残しているということになる。これは歌語としての原初形態を残す必要性を重んじ、手を加えずそのまま残したものだといえる。このことは「にぞありける」と同様に、賢しらを加えず、原典をそのまま後代に伝えようとする歌学者定家の立場がはっきりと現れている。だが、自らが詠む時はその時代に適った表現を用いようとする詠者としての立

場が立ち願れ、とても興味深い現象を定家本『伊勢集』は示してくれているのである。

## 六、まとめ

以上の考察から、西本願寺本は、書写された当時には定着し頻出する「わたつうみ」や「にぎりける」が用いられた本文であるのに対して、定家本は、西本願寺本のような時代を反映した本文しかない場合や、詠者自身がそう詠んでいることがわかる場合はそれに従うが、正しいと判断される本文があればそれを選択して書写していることがわかった。つまり古典の歌ことばとして和歌史の認識に基づき、規範となる形は遵守していうとする姿勢が見られる。ただし、不審に思われる本文が定家本にあっても、別の本文がどこかにあれば手を加えることはあるが、定家本は本文を勝手に作ることをしないため、そのような本文がその当時に存在していたということが推察されるのである。そこに定家本の有用性があるのではないかと考える。

(注)

(1) 岸本理恵氏によれば、定家本『伊勢集』のように、冒頭を定家が書写し、その後を書き継いだ筆跡と一致する家集はいくつもあり、中でも、天理大学附属図書館蔵『秋篠月清集』に

(2) は、定家六十七歳の年にあたる、安貞二年(一二二八年)と記した定家の書写奥書があるという。『国語国文』767、平19・7)

(2) 但し、西本願寺本の訓読では「にぎりける」と読む例が二例ある。

(3) 久曾伸昇『西本願寺本三十六人集精成 新訂版』(風間書房、昭57・9)。ちなみに三十六人集のうち、『兼輔集』、『人麻呂集』上・下、『業平集』、『小町集』は原本が散逸しているため、調査の対象から外した。

(4) 各家集で用いた底本は次の通りである。

『興風集』定家本…『複製日本古典文学館 興風集』(ほるぷ出版、昭58・4)、Ⅱ…西本願寺蔵三十六人集「おきかせ」。

『齋宮女御集』Ⅰ…冷泉家蔵本(藤原定家監督書写本)、Ⅱ…西本願寺蔵三十六人集「さいくうの女御」。

(5) 『村上御集』七八番歌「たまづさの」が『齋宮女御集』の巻末にないのは、西本願寺本『齋宮女御集』(Ⅱ)では二五番歌として、定家本『齋宮女御集』(Ⅰ)では六〇番歌として既に収載されていたためだと考えられる。

(6) 『冷泉家時雨亭書24 散木奇歌集』(朝日新聞社、平5・3、解題・川村晃生)

(7) 『角川古語大辞典CD・ROM版』(角川学芸出版、平14・2)片桐洋一『古今和歌集全評釈』(講談社、平10・10)、二五〇番歌の【語釈】。

(9) ひめまつり会『八代集総索引』(大学堂書店、昭61・12)

(10) 『校本万葉集』で読みを確認すると、平安時代の書写である西本願寺本や元暦校本などには一部「わたつうみ」と表記されたものもあり、その当時から『万葉集』の本文の読みでさえ

も揺れが生じていることがわかる。

(11) 歌学書の引用は全て『日本歌学大系』（風間書房）に拠る。

(12) 『冷泉家時雨亭叢書 8 拾遺愚草 上・中』（朝日新聞社、平 5・

9）『冷泉家時雨亭叢書 9 拾遺愚草 下・拾遺愚草 員外ほか』

（朝日新聞社、平 7・1）

※定家本『伊勢集』の本文は『天理図書館善本叢書 4・平安諸家集』

（八木書店、昭 47・5）を用い、適宜、読点・濁点を施した。その他の和歌の引用は、特に注を施さない限り、私家集は『新編私家集大成 CD・ROM 版』（但し、適宜、読点、濁点を施した）、それ以外は『新編国歌大観 CD・ROM 版』に拠る。

（かとう ゆういち・洛南高等学校非常勤講師）